

# 北白川追分町弥生時代遺跡の展開

——京都大学北部構内 BA30 区（追分地蔵地点）の出土資料——

伊藤 淳史

## 1 はじめに

比叡山西南麓に点在している先史時代の遺跡群のうち、京都大学北部構内に所在する遺跡は、その地名にちなんで、とくに「北白川追分町遺跡」と呼ばれている（以下、「追分町遺跡」と略記する）。縄文時代中期末の住居跡、後期の甕棺・配石墓、晩期の埋没林などの各時期の遺構や豊富な出土遺物によって、近畿地方を代表する縄文時代遺跡のひとつとして、良く知られているところである。しかしながら、それにひきつづく弥生時代前期における遺跡のありようについては、土器の出土や包含層のひろがり具合から、そのまま継続して活動の地となっているとみられるにもかかわらず、目立った遺構がみつからないこともあって、深く関心を寄せられることはなかった。ゆえに本稿では、弥生時代前期に関係する調査成果を中心にあらためて検討を加えて、水稻農耕の定着にともなう社会変動が生じたと予想される弥生時代のはじまりにおいて、追分町遺跡というひとつの空間内で暮らしてつづけていたであろう集団にどのような変化が起こり、またそれが何を背景としていたのかを考えることにしたい。

具体的には、まず、遺跡内で実施された発掘調査のうち、弥生時代前期の土器が最も良くまとまって出土している BA30 区の出土資料を紹介検討する（図51-6 地点、以下各調査の番号と位置は図51を参照）。この調査は、1972年10～11月にかけて、理学部事務棟の建設に先だって実施されたもので、京都大学が主体となって構内でおこなったはじめての調査であるとともに、北白川追分町遺跡としても実質上最初の本格的発掘調査である<sup>(1)</sup>。調査成果は、『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』（1972年11月、以下『概報』と略記）として発表されているが<sup>(2)</sup>、残念ながら多くの人の目に触れるような出版物とはなっておらず、出土遺物の内容も簡略な記載にとどまった。北部構内では唯一量的にまとまった前期の資料でありながら、その後一部が紹介されただけで現在に至っており<sup>(3)</sup>、該期の追分町遺跡を考える上では、全容を明らかにしておくことが必須の資料であると考え。なお、後にも触れるが、1995年には京都市埋蔵文化財研究所によって南に隣接する今出川通り内が調査され、前期の土器が再び大量に出土したばかりか、土器棺墓や土壙墓とみるべき遺構がはじめて確認されている（A地点、aが土器棺墓、bが土壙墓）<sup>(4)</sup>。その成果

と比較検討するうえでも、過去の重要調査の内容を明らかにしておくことは必要であろう。

そして次には、上述の作業により得られた情報も加えて遺跡内の調査成果を整理し、追分町遺跡において、おおむね縄文時代晩期～弥生時代前期という時間幅で、人々の活動の中心がどこに想定され、またそれがいかに変遷しているのかを見、その事象のもつ背景や意義を考えていくことにしたい。もちろん、ひとり北白川追分町のみで完結して人々が活動していたと考えているわけではなく、例えば比叡山西南麓といった範囲の空間に存在する他の弥生前期の集団の動向、さらには京都盆地全域といったひとつの地域全体での動向とも密接に関係していただろう。これらの点についても、かつて拙い論考で若干触れたことはあるが<sup>9)</sup>、いくらかの見通しを得るようにしたい。

なお本稿では、いわゆる遠賀川式土器は弥生時代前期の土器、突帯文土器はすべて縄文時代晩期の土器として記述する。双方の存在時間が一部重複する可能性はかなり高いものと考えているけれども、ひとえに記述の繁雑さと混乱を避けるための便法と了解されたい。また、京都大学が主体となって実施した調査については、これ以後、埋蔵文化財研究センターで用いているアルファベットと数字で表す地区名称や通算の調査回数と一致する固有の地点番号で示す。紙幅の都合から報告文献を逐一示さないけれども、毎年度の年報所収の図版1および調査一覧表をご参照願いたい。

## 2 1972年北部構内BA30区（追分地蔵地点）の発掘調査

### (1) 調査の概要（図51～53・図版23）

出土資料の呈示に先だって、概報の記述を参考に発掘調査の概略を述べておこう。

**調査区の位置と環境** 調査区は、北部構内の南端に位置する。地勢の総体的な傾向として北西から南東へ傾斜する白川扇状地の西南の端にあたるが、現地形は東から西への傾斜が卓越しており、標高63m前後。周辺の状況は、1998年までの時点で縄文後期以降の成果が得られている地点を中心に図51に示した。詳細は後述するが、基本的には東西に尾根状にはしる微高地が南北2つあり（北微高地と南微高地）、ここで紹介するBA30区（6地点）や南側のA地点は南微高地の西端にあると想定される。また、両微高地の間には谷があるとみられ、弥生前期末の土石流の本流が流下したことがわかっている。

なお、この調査地点については、誰ともなく慣習的に「追分地蔵（地点ないし遺跡）」と呼ばれてきており、公的な名称では全くないが、以後併記する。敷地内の東南の一角に、小さな石仏等が多数集められた祠が建っていることに由来する名称だろう。これらの石仏

1972年北部構内 BA30区（追分地蔵地点）の発掘調査

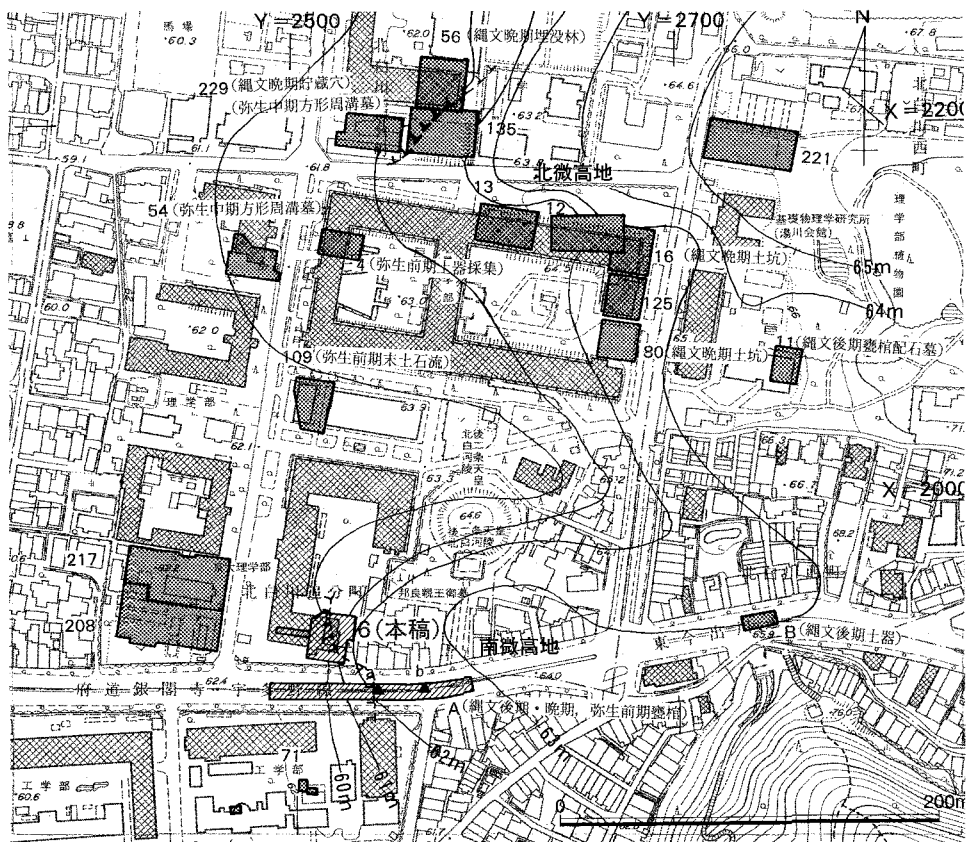


図51 調査区の位置と関連地点（等高線は弥生前期の想定地形） 縮尺1/4000

等は、1921（大正10）年における地質鉱物学教室の建設工事に際して近辺で出土したものが集められた、とも言われているが、記録は全く残されていない<sup>(6)</sup>。

**調査の経緯と経過** 1970年代にはいり、北部構内では農学部校舍群の改築が進んでおり、石棒や弥生前期土器の底部が採集されるなど（4地点）、遺跡が存在しているという認識が高まりつつあった。ただし面的な広がりには把握されておらず、追分地蔵地点でも、ひとたび建設工事が開始され、地表下1.5mまで掘削が進んで土器の出土をみたところで中断し、発掘の体制がとられるに至った<sup>(7)</sup>。そして、まず、遺跡範囲の確認を目的とした東西方向の長さ42mのトレンチと5ヶ所の試掘坑による1次調査が1972年10月25日に実施され、その結果を受けて2次調査が11月9日から22日に実施された。

1次調査では、弥生土器の包含層が現地地表下2.5～2.8mの黑色土層で、建設予定地北東部分を中心に残存していることと、その上面に厚さおよそ15mの花崗岩質粗粒砂層がのっ

ていることが判明した。したがって2次調査では、調査区を建設予定範囲よりも北と東に拡張して東西24.4m、南北26.3mの600㎡あまりとし、弥生土器包含層の直上までは重機で除去した。その後、遺存の良い東北部分300㎡あまりを中心に人力によって包含層上面を検出し、1.5/9.0mの勾配で西へ落ちる旧地表面を露呈させた。この範囲は、3.0m方眼のグリットを設けて徐々に掘り下げ、遺物を取り上げた。最終的に、包含層下面の地形測量を行うとともに、東西方向に断ち割りのトレンチを入れて下層の堆積状況を調査し、層位を記録した。その際、下層から数片の縄文土器片が出土している。図52・53の地形図と層位図がこの際作成されたもので、概報掲載の図を再トレースした。ただし、国土地標については調査時に設定されていなかったため、京都市埋蔵文化財研究所による南側のA地点の報告から図上で復元し、それを現行の構内座標に変換して示している。

**層位と遺構** 東西方向の層位は、微高地末端の旧河道の埋積状況を良く示していた。機械により除去した第1層の黄色砂は、弥生前期末～中期初頭の一時期に生じた土石流による堆積で、京都大学構内一帯で広く検出される鍵層である。これにパックされた第2層の上面が、弥生前期末の地表面ということになる。その第2層の黒色土～黒褐色土は、概報で上部包含層として扱われた、弥生前期の遺物包含層である。基本的には黒色系の砂質土で、厚さ約25cmだが、西方では薄くなり、かつ色調も暗褐色と褪せてきて、粘質になってくる。遺物の包含頻度も減る。これより下層は、第3・4層の砂層を介在して、縄文後期の土器を微量包含する第5層の暗褐色粘質土が堆積しており、下部包含層として扱われた。この層は、水平堆積している砂層a～g層をえぐった崖際を中心に厚く堆積しており、扇状地末端が浸食された後の安定期に形成された腐植土層と言える。第6・7層の砂層は白川系の旧流路に由来するものとみられ、一方、第9層の礫層は高野川系旧流路の河床礫だろう。すなわちこの地点は、縄文後期以前のある時期、蛇行しながら南流していた高野川系の流路により浸食されて崖面を形成していたが、その後、扇状地内を流れる白川系流路により砂が運ばれるなどして、縄文晩期を迎えるころにはほぼ埋積が完了していたもの、と理解される<sup>6)</sup>。実際、西側に約60m離れた208地点や、南側に約100mの71地点での黄色砂直下の標高は59.5～59.7m程度であり、この調査区西端との比高差は50cmにも満たないので、西方～南方にかけては弥生前期の段階にはかなり広く平坦な低地がひろがっていたとみてさしつかえない。ちょうど調査区一帯が、東方の微高地から下ってくる斜面と、西方の平坦な低地との、地形の変換点にあたっていたのである。なお北微高地の56・135地点でも、同様な微高地末端の地形が確認されている（図51破線部分）。

1972年北部構内BA30区（追分地藏地点）の発掘調査

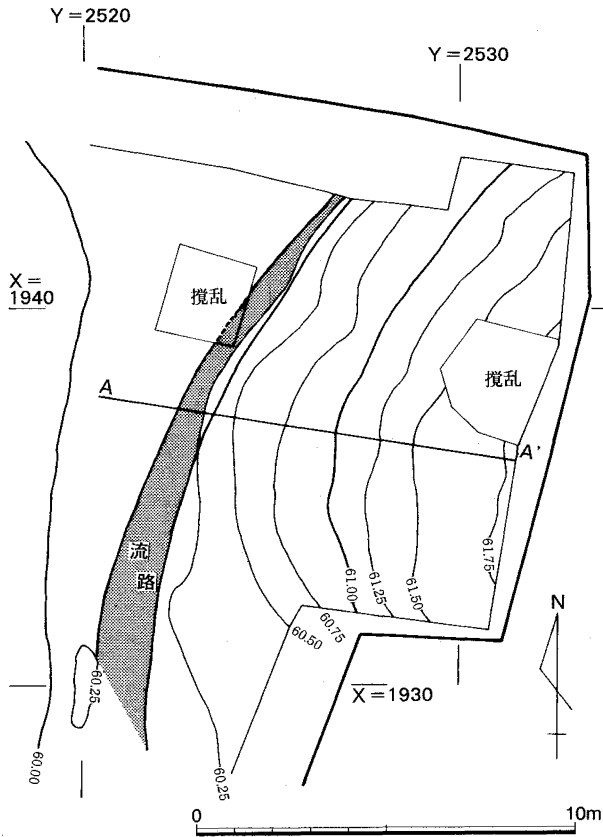


図52 上部包含層（黒色土～黒褐色土）掘りさげ後の地形 縮尺1/200

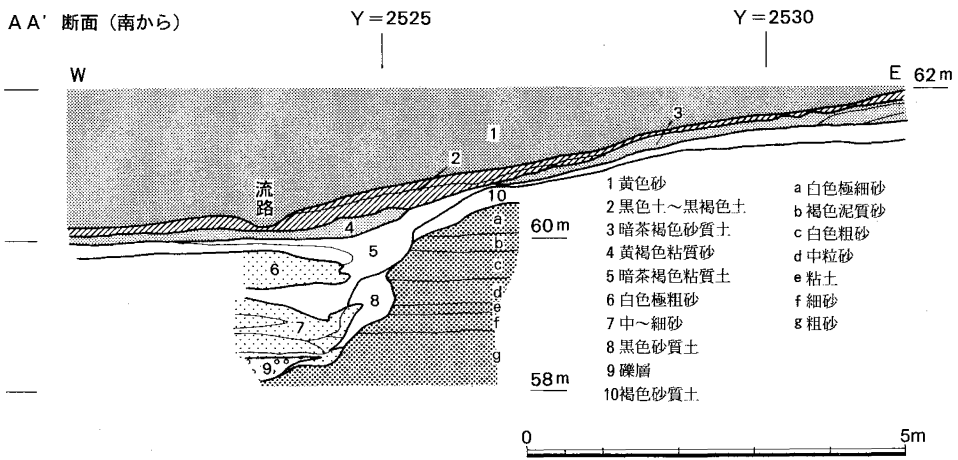


図53 東西方向の層位 縮尺1/100

遺構としては、第2層上面に南北方向にはしる浅い流路状のものが検出されているほかは、顕著なものはない。ただし、南接するA地点では縄文後期・晩期・弥生前期各期の土器棺墓や土坑が見つかっており、特に縄文後期・晩期の遺構や遺物の出土は東方の微高地上にはほぼ限られる状況が明らかとなっている。このことから、追分町遺跡の範囲が、弥生前期については今回の調査地をも含む形で広くとらえられるのに対して、それに先行する時期は微高地上のみにほぼ限られている、ということがわかる。

(2) 出土遺物（表5，図54～60，図版24～27）

追分地蔵地点の出土遺物の大半は、第2層中より出土した土器である。3×3mグリッドで取り上げられていた土器類は、注記と接合がされておおよそ器種別に収納されていたが、今回内容を確認したところ、まだかなり接合することがわかったので、有文破片や口縁部や底部を中心にあらためて接合作業を実施した。その後に点数のカウントを行い、結果を表5に示した。特徴から明らかに縄文晩期以前とみなせるものはごくわずかしかなく、大半が弥生前期のいわゆる遠賀川式土器である。総破片数の8割以上が無文の破片であるため、このなかにはいずれとも判別しがたいものも若干含まれているが、大きく傾向は変わらないものと判断している。

破片数カウント後、口縁部・底部・有文破片はすべて実測・採拓し、個々に固有の番号をつけて登録した。本稿では、小破片の一部を除いてほとんどを図示する。器種構成などの検討は後述するとして、まずおおむね時代・種類別に説明しよう。

a. 縄文時代後期の土器（1～12）

10・11のみ下層の第5層からの出土で、それ以外は第2層中で混在して出土したとみられる。いずれも小さな破片で、厳密な所属型式の判別は難しいけれども、おおむね後期前葉の北白川上層式1期ごろを中心とするようだ。薄手の小さな破片5は、浅い沈線内に押し引き状の刺突が認められるので、それより下る時期の可能性もある。縄文はRL（1・2・6）がLR（7）よりも目立つようである。9は中央を小さく円錐形にえぐった瘤状の装飾で、瘤の表面には縄文が施文されている。有文深鉢の肩部付近であろうか。11・12は粗製深鉢の口縁部片で、いずれも器表面をなでて仕上げる。11はやや厚手で口唇部が弱い面を成すが、12は薄手で細く尖る口縁であり、かつ角閃石を多く含む胎土である。

b. 縄文時代晩期の土器（13～19）

いずれも第2層中で弥生前期の土器と混在して出土。晩期末の刻目突帯文土器を中心とする。13は滋賀Ⅳ式の精製浅鉢の口縁部。口唇は幅広く面をとり、内外面とも端部から

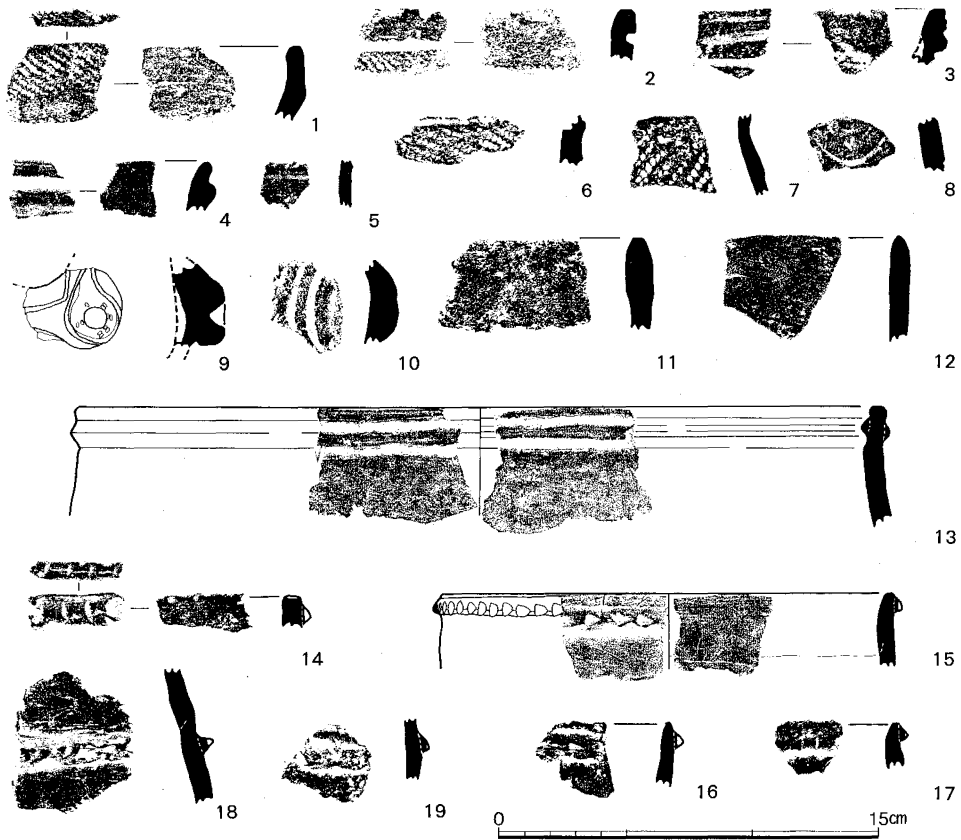


図54 BA30区出土縄文時代後期・晩期土器 縮尺1/3

やや下がった位置に紐状の突帯を貼り付け、全面を横位方向に丁寧に磨く。とくに内面側の突帯は、上下を粗く磨いて浮彫風の造出を意識している点に注意される。14は同じ滋賀里IV式の深鉢口縁部とみられ、面をとった口唇部には浅い押し引き状のD字刻みが、端部からやや下がって貼り付けられた断面三角形の突帯上には細いV字刻みが施される。15～17も深鉢の口縁部で、丸く収めた口唇部に接するように刻目突帯が貼り付けられ、船橋式ないし長原式だろう。15・16はD字、17は細いV字の刻みである。18・19はこうした深鉢の突帯をもつ胴部～肩部破片であり、18の突帯上には鋭いD字刻みが施される。

以上の後期・晩期の土器は、表5に示したように、弥生前期土器に較べて出土量は圧倒的に少ないが、A地点では崖面より上部でこれらの時期の資料がまとまって出土している。本調査区は微高地西端の斜面部にあたり、縄文後期・晩期には明らかに遺跡の主体となる範囲からはずれていたことがわかる。

c. 弥生時代前期の土器 (20~145)

本調査区出土資料の主体を成す。残存率が低く器形や径を復元できた個体は少ないが、器種・部位別に示しておく。以下、壺形土器・甕形土器などはそれぞれ壺・甕と略記する。

**壺口縁部 (20~23・37~51)** 大きく外反して開く形状で、端部を曖昧に面取りすることを基本としている。44や51のように強く短く外反するものは鉢形土器の口縁かもしれないが、便宜的にここに含めておく。器面調整は内外とも横位の丁寧な磨きであるが、39などに端的に示されるように、外面には縦位の、内面には横位の刷毛目が消し残されている例も多くみられる。37・38・40・50は、口唇部周辺を強めに横撫でし、とくに50は内面側が凹線状にくぼむ。この50は端面にV字状刻みをもつ点でも特異な個体である。ほか端面に文様をもつのは23・48・49の3点のみで、いずれも1条の匏描沈線文である。

**壺頸部 (24~26・52~60)** 匏描沈線による文様帯をもつものが中心で、24・25・52・53・59は、文様帯の上側や下側を低めた削出突帯となっている。貼付突帯によるものは2点のみで、26は太くしっかりした断面蒲鉾形の突帯に細長いO字刻みを施すもの、60は下書きの匏描沈線1条を深くしっかりと施した上に帯状の粘土帯を貼り付け、中央を横撫でによりへこませることで見かけ上2条に見せている。

**壺胴部 (27~34・61~80)** 頸部と同じく匏描沈線による文様帯をもつものが中心である。27・28は文様帯の上下側をしっかりと低めた削出突帯で、29・61~65も上側ないし下側の削り出し部分が残存している。27は下端に帯状の剥離痕と下書きの匏描沈線の一端が残り、最大径部付近に貼付突帯もめぐっていたことがわかる。33は複雑な過程を経た特徴的な装飾をもつ。8条の匏描沈線文を施文した後に、上から4条目と5条目の沈線上に突帯を貼り付けてV字に刻み、さらに沈線間に竹管状工具による刺突列を施す。また、最上段の沈線の上側は磨きによって低められている。これらの沈線はいずれも深くしっかりとしたものだが、対照的に細く浅い沈線を多条にめぐらしたものに70や72がある。34ははっきりした匏描沈線が2条まで確認できるが、これに沿った帯状の剥落痕がみられるので、これらは下書きであり、本来的には貼付突帯の個体であったといえる。ほか、貼付突帯で飾るのは77~80がある。77は無刻の、78はV字に刻んだ突帯のようだが、残りが悪い。79は剥落した突帯の小片で、60と同様な見かけ上2条に見える突帯にV字の刻みを施している。80は横に大きく伸びるレンズ状の押捺に見えるよう成形を施した特異な突帯である。かなり大型の壺になるようだが、裏面が剥離して本来の厚さはわからない。

**蓋 (35・36)** 35は背の高い笠形の器形と想定され、厚手の器壁で内外両面を丁寧に



1972年北部構内 BA30 区 (追分地藏地点) の発掘調査

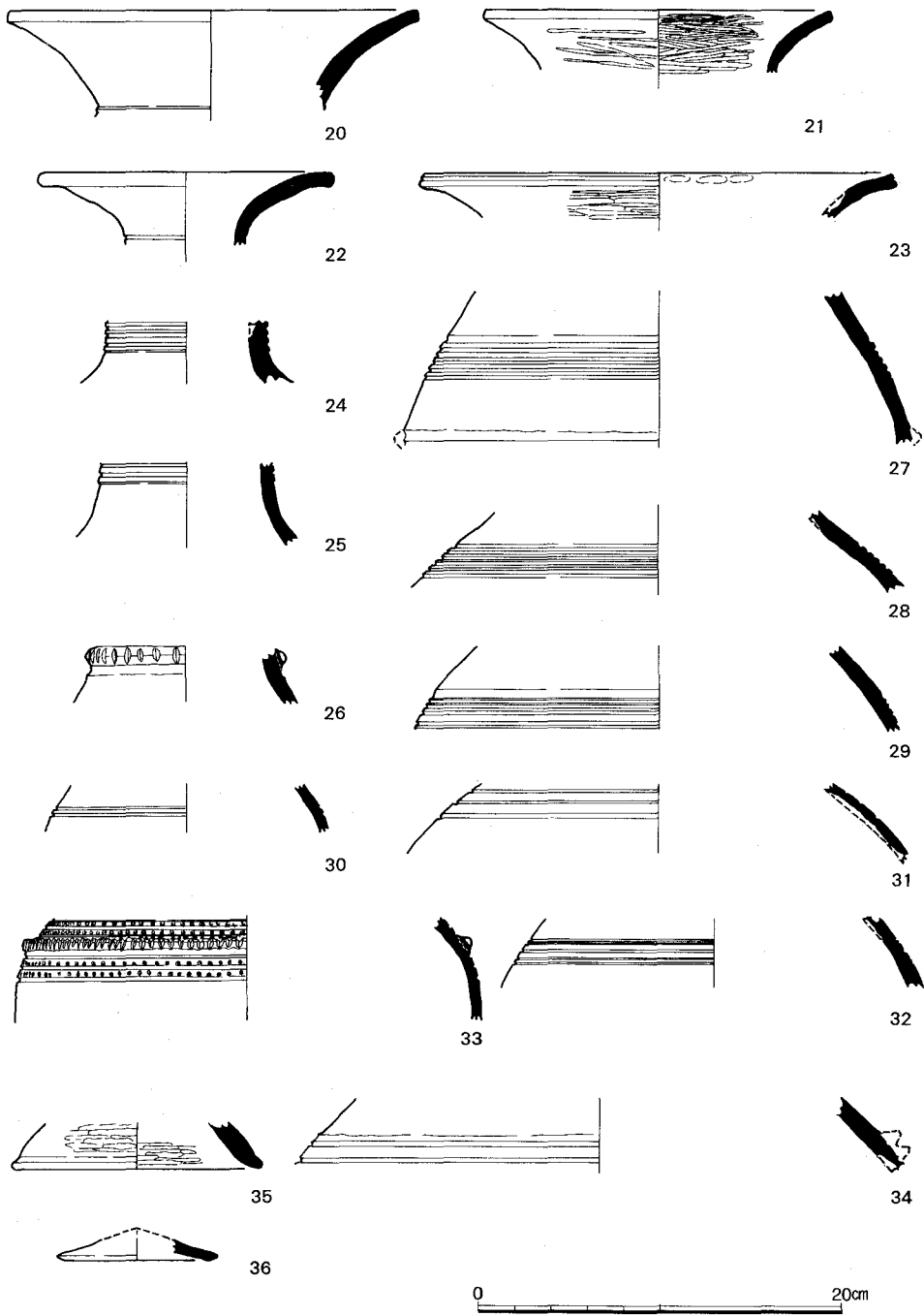


図55 BA30 区出土弥生時代前期土器(1) 縮尺1/4

北白川追分町弥生時代遺跡の展開

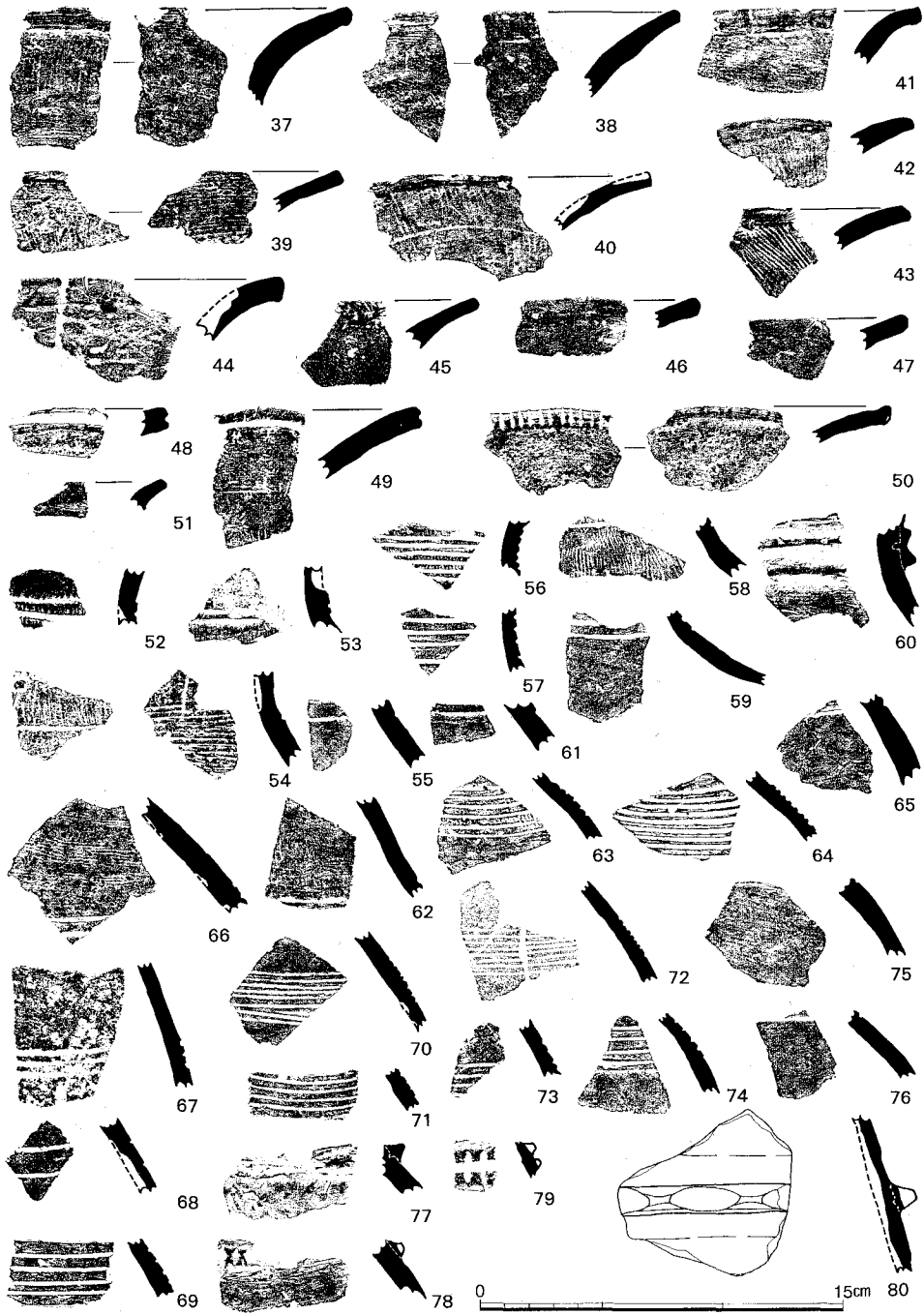


図56 BA30区出土弥生時代前期土器(2) 縮尺1/3

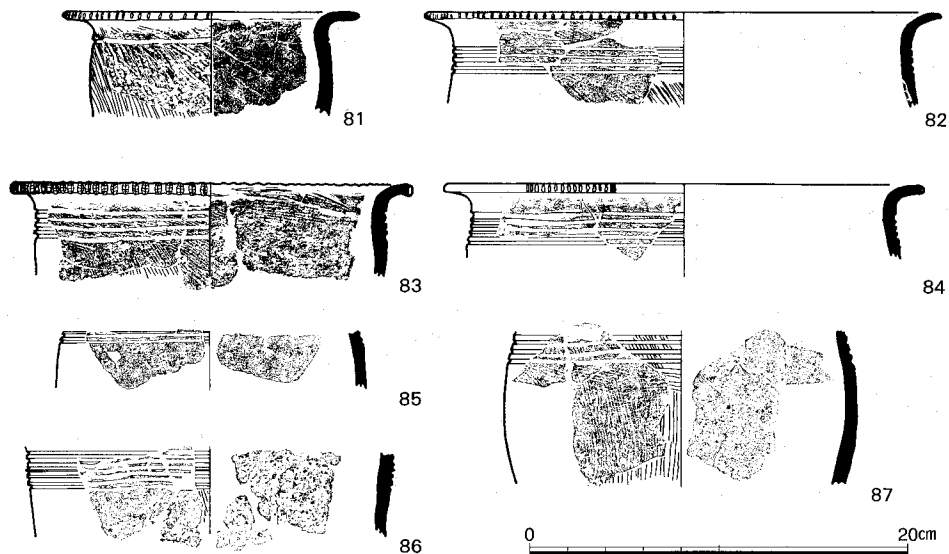


図57 BA30区出土弥生時代前期土器(3) 縮尺1/4

磨いている。36は薄手で丈の低いもので、やや作りが粗雑で径も小さい。このほかに、図化できないが蓋らしき小片がもう一点ある。いずれも壺用だろう。

甕口縁～胴部（81～131） やはり残存が悪く、口縁を推定復元できた個体はわずかしかないが、81は15cmあまりの小型品、83は20cmあまりの中型品、82・84は26～28cmの大型品である。器形としては、口縁端部が短く強く外反するものが多く、特に81は水平な鐙状を呈する。ただし、いわゆる「瀬戸内系甕」の範疇に属するものはみられない。また、89や96のように、ごく短く「く」字状に外折するだけのものもある。端部は丸く収めて篋で刻むことが基本だが、88～90は刻みをもたない。なかでも88は、端部をしっかりと面取りし、器表面も撫でつけており他の甕と較べて質感が異なる。刻みは、端部正面からのV字状の刻みを基本としているが、形状は多様で斉一性に乏しい。81や82は口唇先端の軽く浅い刻み、83は木目が残る大きく深い刻み、84や93は細く鋭い刻みで、84は一周せず一部分のみ施される。95や96は刻みというよりもO字状の押捺に近く、95には布目の圧痕が認められる。101や102は、施文具の入り方が正面からではなく端部の下側から深く抉るような刻みであり、また、104～106も端面の下端のみを軽く刻んでおり、技法の点でやや趣を異にしている。頸部の篋描沈線文については、断面V字形のはっきりしたものが中心だが、88・96・107は先丸の棒状工具を引きずったかのような断面U字形を呈している。特殊なモチーフは唯一131のみで、山形文を組み合わせたモチーフとなるようである。器面調整は、

北白川追分町弥生時代遺跡の展開

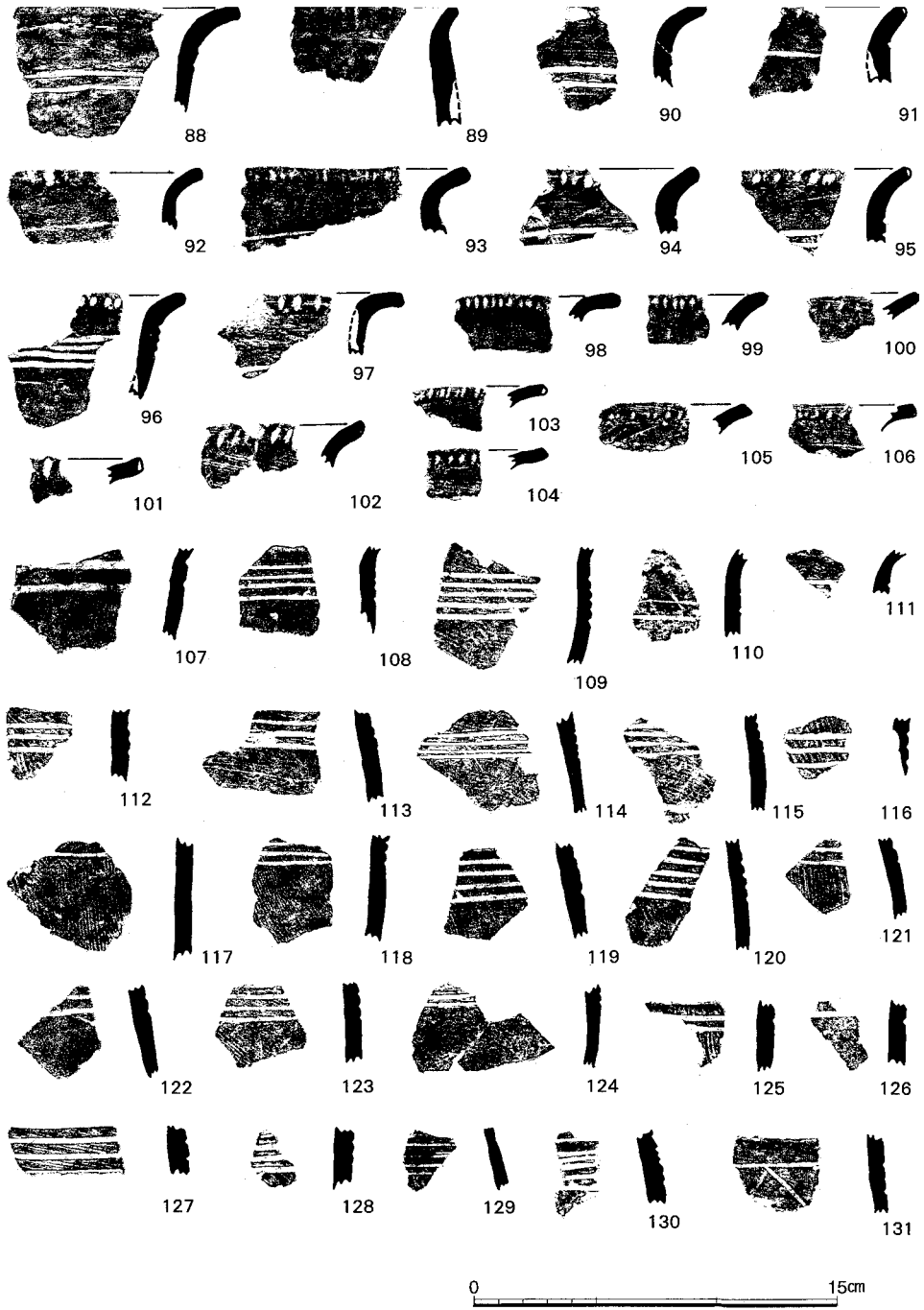


図58 BA30区出土弥生時代前期土器(4) 縮尺1/3

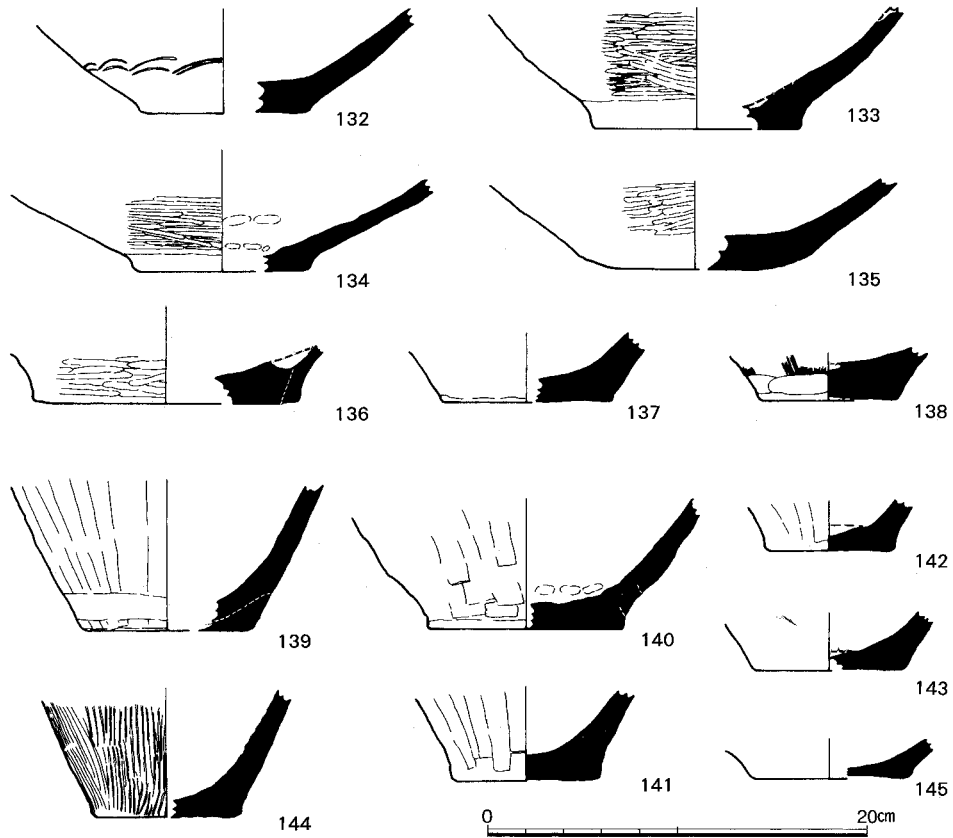


図59 BA30区出土弥生時代前期土器(5) 縮尺1/4

ほとんどが、外面は7条/cm程度の縦位～斜位の刷毛目調整、口唇周辺から内面にかけてを撫でて仕上げるというこの時期の一般的なありかたを踏襲している。やや趣が異なるものとしては、82の浅い細密条痕風の調整、83の口縁内面に残る横位の刷毛目調整があり、また108のように内外面を丁寧に磨くのも、甕形土器として見た場合きわめて珍しい。

底部（132～145） 形態や器面の調整から、132～138が壺あるいは鉢、139～145が甕とみられる。132は黒色を呈し、篋描沈線2条により上向きの連弧状文様がめぐる。壺の場合外面は横位に篋磨きされているが、甕の場合底部末端まではっきり刷毛目調整がわかるのは144のみで、139～142のように板状工具による縦位の軽い擦過痕の方が目立つ。145はかなり磨滅しており、縄文土器の底部の可能性もある。ほとんどが破損しているので器壁の断面観察が容易であるけれども、成形技法復元の手がかりとなるような擬口縁を示す例は乏しく、この資料中にはいわゆる「側面積み上げ法」を示す例は確認できなかった<sup>(6)</sup>。

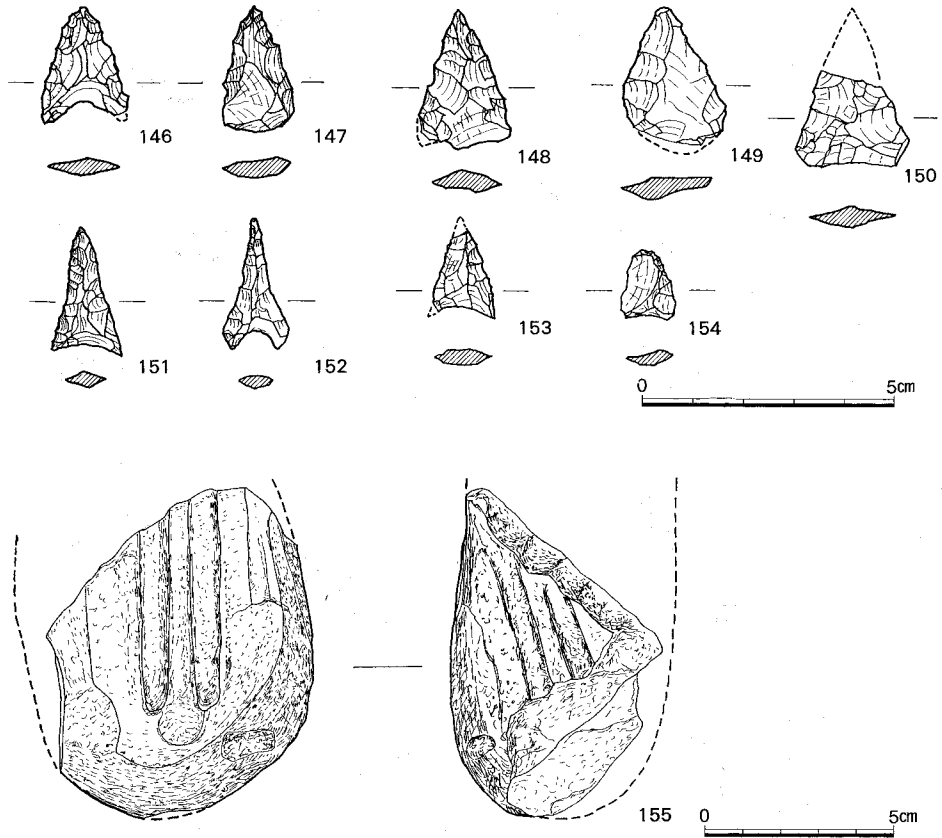


図60 BA30区出土石器 146~154縮尺2/3, 155縮尺1/2

ただ、138や141のように中央がドーナツ状に凹んでいる例が目につくことが注意され、底部の円盤部の製作段階を反映しているのかも知れない。

d. 石器 (146~155)

未製品・欠損品含めてサヌカイト製とみられる石鏃9点、約30点の剥片、砂岩製の砥石などが出土している。大半は、土器と同じく弥生前期に帰属するものと考えて良からう。砥石 (155) はかなり欠損しているが、残存する2面にそれぞれ平行する2条の溝を残す。

(3) 出土弥生前期土器について

出土資料の主体をしめる弥生前期の土器について、ここで、その特徴や編年的位置づけなどを中心に若干の検討を加え、簡潔にまとめておきたい。

器種構成について 出土土器については、破片から判別した器種別点数と、それぞれの部位別装飾の内訳についても表5に示した。器種別点数については、特徴の把握しやす

1972年北部構内BA30区（追分地蔵地点）の発掘調査

表5 BA30区出土土器（接合後）

| [種類別点数]     | [弥生時代前期器種別点数] | [弥生時代前期底部点数] |
|-------------|---------------|--------------|
| 縄文時代後期 19   | 壺・鉢 97        | 壺・鉢 21       |
| 縄文時代晩期 15   | 甕 97          | 甕 20         |
| 弥生時代前期 197  | 蓋 3           | 同定不可 2       |
| 無文胴部破片 1197 | 計 197         | 計 43         |
| 計 1428      |               |              |

| [弥生時代前期土器部位別装飾・うち ( ) は削出突帯をもつもの] |        |       | [弥生時代前期土器部位別装飾・うち ( ) は削出突帯をもつもの] |        |       |      |       |    |
|-----------------------------------|--------|-------|-----------------------------------|--------|-------|------|-------|----|
| 壺口縁部                              | 端面無文   | 19    | 壺胴部                               | 沈線 1条  | 0     | 甕口縁部 | 端面無文  | 4  |
|                                   | ◇ 沈線   | 3     |                                   | ◇ 1+a  | 4(1)  |      | ◇ 有刻  | 34 |
|                                   | ◇ 刻み   | 1     |                                   | ◇ 2条   | 2     |      | 計     | 38 |
|                                   | 計      | 23    |                                   | ◇ 2+a  | 6     |      |       |    |
|                                   |        |       |                                   | ◇ 3条   | 1     |      |       |    |
| 壺頸部                               | 沈線 1条  | 1     |                                   | ◇ 3+a  | 3     | 甕頸部  | 沈線 1条 | 3  |
|                                   | ◇ 1+a  | 4(2)  |                                   | ◇ 4条   | 2     |      | ◇ 1+a | 8  |
|                                   | ◇ 2条   | 0     |                                   | ◇ 4+a  | 4(2)  |      | ◇ 2条  | 4  |
|                                   | ◇ 2+a  | 4(3)  |                                   | ◇ 5条   | 3(3)  |      | ◇ 2+a | 10 |
|                                   | ◇ 3条   | 0     |                                   | ◇ 5+a  | 0     |      | ◇ 3条  | 3  |
|                                   | ◇ 3+a  | 1     |                                   | ◇ 6条   | 0     |      | ◇ 3+a | 7  |
|                                   | ◇ 4条   | 2     |                                   | ◇ 6+a  | 3     |      | ◇ 4条  | 7  |
|                                   | ◇ 4+a  | 2(1)  |                                   | ◇ 7条   | 0     |      | ◇ 4+a | 7  |
|                                   | ◇ 5条   | 0     |                                   | ◇ 7+a  | 0     |      | ◇ 5条  | 2  |
|                                   | ◇ 5+a  | 0     |                                   | ◇ 8条   | 2(1)  |      | ◇ 6条  | 1  |
|                                   | ◇ 6条   | 0     |                                   | ◇ 8+a  | 1     |      | ◇ 6+a | 1  |
|                                   | ◇ 6+a  | 2     |                                   | 貼付突帯無刻 | 1     |      | 計     | 55 |
|                                   | 貼付突帯無刻 | 1     |                                   | ◇ 有刻   | 3     |      |       |    |
|                                   | ◇ 有刻   | 1     |                                   | 計      | 35(7) |      |       |    |
|                                   | 計      | 18(6) |                                   |        |       |      |       |    |

口縁部と底部、および頸部～胴部の有文破片からの同定点数のみであるが、構成をみるうえでは問題なかろう。口縁や底部のみでは区別が難しい壺と鉢はひとくくりになっているが、鉢の点数はそれほど多数になるとはみられないことから、おおむね壺と甕が半々か、わずかに甕が上回る程度の構成である、とみなして良い。これは、他の弥生前期遺跡の器種構成と傾向を同じくするものと言えよう。

また、資料中には、他地域からの搬入品あるいはそうした系譜につらなる土器と明確に認められるものは含まれてなかった。これまで京都大学構内から弥生前期土器が少量でも出土する場合、東海系の条痕文土器が含まれていることがままたり、それ以外でも、いわゆる生駒西麓産とよばれる胎土をもつものや瀬戸内系の甕の出土が知られる<sup>99</sup>。本資料のようにある程度まとまった量がありながら搬入品や異系統土器が一点も含まれない場合の方が珍しいといえよう。生駒西麓産のものは前期でも比較的早い段階に、東海系の条痕文土器や瀬戸内系の甕は前期末葉に出現する頻度が高くなると考えた場合、本資料の時間的位置を反映した内容である、といえなくもないだろう。

装飾技法の特徴について 次に、口縁端部の装飾についてみてみよう、壺甕ともにこの時期のごく一般的なあり方に従っているといえよう。壺には沈線や刻みを施すものがわずかに存在するものの、肥厚あるいは拡張する傾向をみせるものは無い。甕は基本的に刻むものが中心で、無文のものがわずかにある。いずれも横撫ではそれほど発達していない。

頸部や胴部の装飾は、削出突帯と沈線が中心である。壺には貼付突帯もあるが、剥離痕のみ残るものを含めても、きわめて少数派である。削出突帯Ⅰ種は存在せず、篋描沈線と組合う削出突帯Ⅱ種多条のみであり、頸部・胴部の文様帯の四分の一を占めている。その造出技法としては、沈線文帯最上段ないし最下段の沈線文の片側（上側ないし下側）を、①板状工具で縦位方向に押さえて低める、②横位方向の磨きにより低める、のいずれかが観察される。本資料中の削出突帯に目立つのは①の技法で、頸部文様帯や胴部文様帯の上段側に採用されており、板状工具の木口圧痕や擦過痕が明瞭に観察できる（例えば、図版27-2参照）。これらがはっきりした器面上の段差を形成しているのに対して、②の技法は、胴部文様帯の下段側に採用されているが、段差はいずれも鈍く曖昧であり、なかにはほとんど段を成していないようなものもある。篋描沈線については、本来の条数を決めがたい資料が多いが、1条～8条までが認められ、おそらく10条を越えるようなものは無かったと想定される。壺甕ともに断面が深いV字状を呈するようにしっかりと施されているのが通例であり、浅く細い沈線が多条にめぐる70・72のようなものは例外的である。

このほか、装飾が目を引く資料として、33・80・131を挙げておく。うち、33のような沈線と竹管刺突文を組み合わせたモチーフ、131のような山形文のモチーフは、他遺跡出土資料にも散見されるので、少ないながらも前期土器の装飾のパラエティのひとつとして組成していたものといえる。80は、貼付突帯上に横に長いレンズ状の窪みを、押捺ではなく粘土を抉り取るにより造出している。唐古遺跡出土品に類似のものが知られるが<sup>10)</sup>、珍しいものだろう。やや無理して系譜的な関連を探るならば、本例とはやや趣を違えるものの、伊勢湾地方の土器である縄文晩期末の馬見塚式あるいは「亜流遠賀川式」と呼ばれる前期の土器は、レンズ状の押捺をもつ貼付突帯を特徴としている。

編年の位置づけ 以上に紹介してきた弥生前期の土器群は、壺甕ともに多条の沈線施文を特徴としており、既往の編年観での前期新段階に位置づけられる。そして、型式学的にみて格別に古く考えるべき個体もみられないことから、包含層出土ではあるものの、時間幅の短いまとまった一群とみなしたい。そうした前提に立ってさらに細かくみると、削出突帯Ⅰ種は見あたらず沈線が多条化してはいるけれども、同Ⅱ種は一定の比率を占め



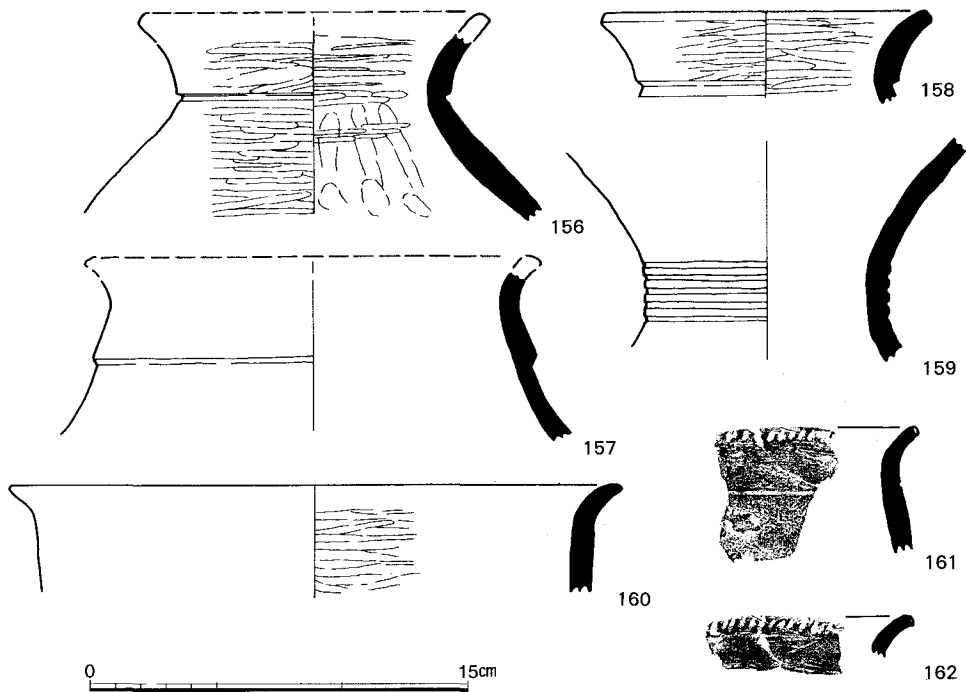


図61 BE32区（12地点）出土土器（156・161・162），BE33区（16・125地点）出土土器（157・159），BD33区（180地点）出土土器（158・160） 縮尺1/3

て存在し、また貼付突帯は複数条で文様帯を成す例はみられない。そして、口縁端部などを加飾する傾向にも乏しい、という状況も考慮すると、これらを中段階的な特徴の残存ととらえて、新段階のなかでもやや古相の様相を示す資料として位置づけたい<sup>12)</sup>。

ところで、近畿地方の弥生土器編年の重要な課題のひとつとして、前期新段階の指標である多条化した篋描沈線文の土器と、第Ⅱ様式の櫛描文土器とが、どの程度時間的に重なっているのか、という問題がある。山城地域の場合、第Ⅱ様式のはじめまで多条沈線文が一部残る、という編年でおおむね落ちついているけれども<sup>13)</sup>、その場合でも、櫛描文出現後でそれと共存する段階の篋描沈線文の土器と、それ以前の段階のものとの型式学的な違いを厳密に特定することは、やはり重要な課題として残されるだろう。京都大学構内一帯で鍵層となる黄色砂層（本調査区での第1層）より下層からは櫛描文が一点も出土していない、という状況を考えたとき、ここに報告した資料群は、確実に櫛描文の出現前と認定できる段階の土器様相を知り得るものとしても、重要な意義をもつものだろう。

ここで、量的には多くないが構内遺跡の他地点の資料と比較してみよう（図61）。いず

北白川追分町弥生時代遺跡の展開

表6 京都大学構内遺跡出土弥生土器の編年

|        | 京都大学構内遺跡<br>地区名(地点番号)     | 要素 | 突帯文土器 | 段 | 削出突帯 I<br>(少条) | 削出突帯 II<br>(多条) | 沈<br>線<br>(少条) | 沈<br>線<br>(多条) | 貼付突帯<br>(少条) | 貼付突帯<br>(多条) | 〔様式と編年〕<br>(木村社一九八九) | 〔雲宮遺跡〕<br>(京都府一九九七) | 〔鶏冠井〕<br>(高市一九九七) |
|--------|---------------------------|----|-------|---|----------------|-----------------|----------------|----------------|--------------|--------------|----------------------|---------------------|-------------------|
| 前<br>期 | (古) BE33区(125) BD33区(180) |    |       |   |                |                 |                |                |              |              | 山城 I-1               | 雲宮 I 期              |                   |
|        | (中) AU30区(214)・SR1        |    |       |   |                |                 |                |                |              |              | 山城 I-2               | 雲宮 II 期<br>雲宮 III 期 | 鶏冠井 I 期           |
|        | (新) BA30区(6)              |    |       |   |                |                 |                |                |              |              |                      | 雲宮 IV 期             |                   |
|        | AO22区(220)                |    |       |   |                |                 |                |                |              |              | 山城 I-3               | 雲宮 V 期              | 鶏冠井 2 期           |
|        | BF30区(229) AR25区(238)     |    |       |   |                |                 |                |                |              |              |                      |                     |                   |
| 黄色砂層   |                           |    |       |   |                |                 |                |                |              |              |                      |                     |                   |
| 櫛描文出現  |                           |    |       |   |                |                 |                |                |              |              |                      |                     |                   |
| 中<br>期 | II BF30区(229)             |    |       |   |                |                 |                |                |              |              |                      |                     |                   |
|        | BE29区(54)・方形周溝墓           |    |       |   |                |                 |                |                |              |              |                      |                     |                   |
|        | III AO22区(220)・SD19       |    |       |   |                |                 |                |                |              |              |                      |                     |                   |
|        | IV AP22区(111)・SD18        |    |       |   |                |                 |                |                |              |              |                      |                     |                   |

れも、黄色砂より下層の出土資料である。本部構内東南隅の AU30 区 (219地点) の流路 SR1 内黒褐色土層出土資料は、櫛描沈線が 3 条までにとどまるもので、中段階のうちに収まるものとして明らかに今回の資料群に先行する段階である。これより形式的に遡る段階の資料は、未発達の口縁部下側を段状に区画する 156~158 が挙げられるが、刻目突帯文土器がまとまって出土する 125・180 地点などで微量混じって出土するにすぎない。一方、北部構内 BF30 区 (229地点) 暗褐色土層出土土器は、少量であるにもかかわらず、壺口縁端部の装飾や多条の貼付突帯、瀬戸内系甕の存在など、新相の特徴を顕著に示している。また、総合人間学部構内 AO22 区 (220地点) では、頸部に多条の櫛描沈線文が収斂した壺が出土し、AR25 区 (238地点) でも同様な壺形土器を含むまとまった資料が得られている<sup>44)</sup>。これらの資料中に削出突帯はほとんど含まれず、貼付突帯文は多条になり文様帯を成している。よっていずれの資料も、今回よりも後出の可能性が高いといえる。

以上、遺構にともなう資料ではないけれども、既往の型式学的な変遷観にのっとり地点別の資料の序列を求め表 6 にまとめた。結果として、追分地蔵地点の資料の位置づけについて、櫛描文の出現までにはもう一段階その後に介在するもの、という見通しを得ることになった。すなわち、削出突帯 (I・II 種とも) がほぼ消えた段階がその後に続き、しか

るのち櫛描文の出現をみる、という変遷が想定されるのである。

この2段階の変遷を、山城地域で近年相次いで該期のまとまった資料が報告された長岡京市雲宮・向日市鶏冠井の両遺跡での区分に対応させると、雲宮遺跡でのⅣ期とⅤ期に、鶏冠井遺跡の2期にあてはめることができる<sup>69</sup>。また、最近の大和地域の編年案でみればⅡ1 a様式とⅡ1 b様式の様相に<sup>69</sup>、摂津地域では高槻市芥川遺跡の前期土器群の様相と相似していると思われる<sup>70</sup>。遺跡や地域によっては、ここで想定した最後の段階が安定して分離できていなかったり、あるいは櫛描文出現後の段階として評価されているのが実態とみられるが、京都大学構内遺跡一帯では、黄色砂は目下のところ櫛描文の出現前後を隔てる鍵層として有効に活用できる。今後は、ひきつづき下層出土の資料でどこまで型式学的に下り得る様相が確認できるのか継続して追究するとともに、他地域における櫛描文出現前後の資料と比較検討することで、土器編年上の議論のみならず櫛描文出現の時間的ずれの同定や地域色の抽出へと向かうことを課題としたい。

### 3 弥生時代前期の北白川追分町遺跡

比叡山西南麓の先史時代の諸遺跡に限らず、追分町遺跡の内部においても地点によって主体となる出土土器型式が異なることが、これまでの成果の蓄積によってわかりつつある。ここでは、こうした地点別の土器型式の違いやその量的な多寡を、さしあたりその地での人間の諸活動の時期や活発さを反映するものと単純に理解して、弥生時代前期を中心とした追分町遺跡内部の動態を明らかにし、またその意味するところを考えたい。

**遺跡の範囲と地形環境** 最初に、想定される遺跡の範囲や当時の地形環境を確かめておこう。あらためて図51を参照されたい。現在までの知見による限り、遺跡は、おおむねここに示された京都大学北部構内南半と本部構内北辺部分を含んだ空間で、東西にはゆる南北2つの尾根状の微高地を中心に展開していると想定される。北側の微高地は、13地点から180地点といった一帯が該当し、この北縁の斜面から低地にかけての様子が56・135・229地点で明らかとなっている。また、逆に東方の221地点までいくと、微高地上でありながら先史時代遺物の出土は稀少で、周辺的な様相になる。一方、南側の微高地は、今回紹介した6地点、その南のA地点で西端を示す斜面が検出されている。A地点の西半や208地点では起伏の乏しい低地の状況を呈していたが、遺物の出土量は減り、遺跡の中心である微高地上に対してはやはり周辺的な様相を示している。

これら南北の微高地の中間にあたる109・217地点では、弥生前期末に比定される巨礫を

交えた土石流の本流にあたっており、良好な包含層が見つからない。本来的にこの中間地帯は谷状の地形であった可能性が高く、南北の微高地を隔てていたものと想定される。

なお従来、本部構内北東辺には、今出川通り付近が白川系の流路に隔てられていて、追分町遺跡とは別の縄文・弥生時代遺跡が存在すると想定されてきた。71地点試掘坑での包含層の確認がその根拠となってきたものである。しかし、A地点での良好な包含層の確認から、遺跡は本部構内にまで及んでいることがほぼ確実となった。あえて別の遺跡を想定せずに、追分町遺跡の南限が71地点あたりにまで及んでいる、と考える方が自然だろう。

**活動中心地点の変遷** 今回紹介した追分地蔵地点（6地点）と京都市埋蔵文化財研究所調査のA地点での成果から、弥生時代前期後葉に至ってこれらの地点の位置する南微高地一帯で遺物出土量が激増することがわかり、該期にそこでの活動が活発化したことは明瞭である。ただしA地点では、滋賀里Ⅲb式の土器棺をはじめ、長原式までの縄文晩期後葉の各型式も一定量出土している。とはいえ、ともに出土している遠賀川式土器の出土量を凌駕するには遠く及ばない。また、こうした遠賀川式土器の出土が、検出された微高地から低地に移行する斜面付近一帯を中心としつつひろく全域に及んでいるのに対して、縄文後期・晩期の土器は、微高地上を中心とするように狭く限定される傾向にある。追分地蔵地点でこうした時期の土器が稀少であるのは、この主たる分布域はずれた斜面にあっていたからだろう。

遺跡内の他の地点での遠賀川式土器の出土状況を見ると、さきに図61-156～158に挙げたような、未発達の間縁下に段状の装飾をもつ古い様相を示すものが、それぞれ12・125・180地点で出土している。いずれも北微高地上にあたり、小規模な谷を含むものの標高の高い一帯である。また、出土する土器は、滋賀里Ⅲb式から長原式までの縄文晩期後葉が中心であり、多量のそれらに混じってこうした古相を呈する遠賀川式土器の破片がわずかにともなうにすぎない状況である。低地への変換点にあたる56・229地点でも遠賀川式土器は出土しているが、やはり多量の晩期後葉の土器群に混じって微量が出土するにすぎず、しかも、ここではいずれも明らかに新相を呈するものである。ともあれ、古相新相のいずれにしろ北微高地での遠賀川式土器の出土は、きわめて少量にすぎないのである。

以上の様相をまとめると、縄文晩期後葉以降、弥生時代前期前半までは北微高地が中心で、南微高地は周辺的な位置にあり、かつその範囲も局所限定的な傾向がみられたのが、前期後半にいたってその関係が逆転し、南微高地一帯がひろく活動の中心地となったもの、となろう。突帯文土器最終末の長原式と遠賀川式土器の古段階とが並存していたと考えよ

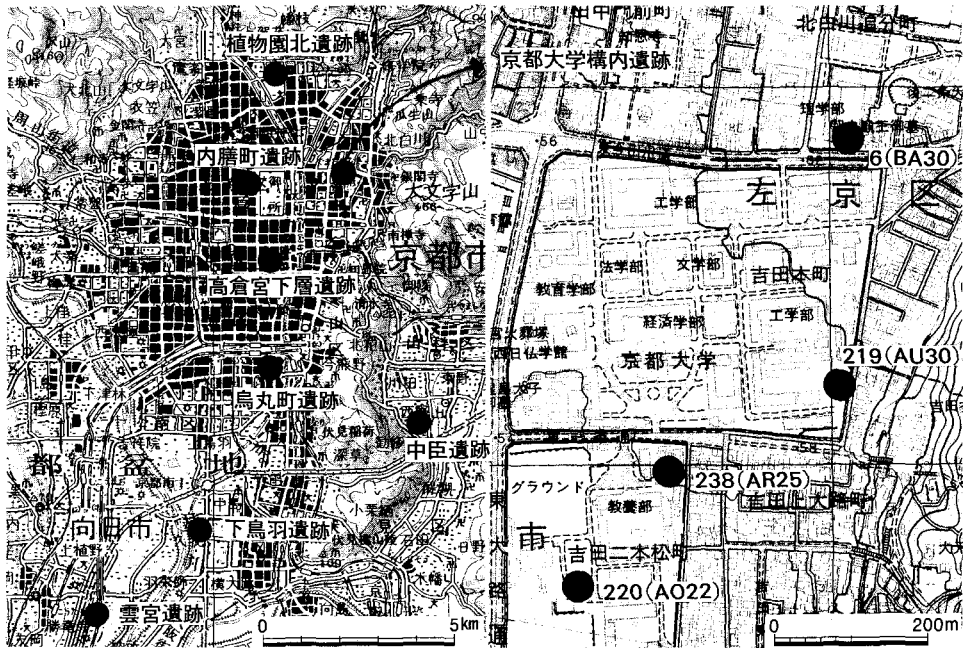


図62 弥生時代前期の主要遺跡（左：京都盆地1/20万，右：京都大学構内1/1万）

うが、時間的に前後関係をもって存在するものと考えようが、この図式に変化はない。ただ後者の理解に立つ場合は、遠賀川式古段階の土器量が極端に少なくなる点に不自然さをいめないのであるが。

**変遷の背景** 上述したような、弥生前期後半における北微高地から南微高地への活動中心地の変遷が大勢として間違いないものとして、その理由や背景を考えてみたい。

ひとつには、自然的な要因、すなわち弥生前期には流路の埋積が進んで、谷の利用価値がなくなってしまったから、という理由が想定できよう。しかし、南微高地の方にそれに代わる谷が多いわけではなく、むしろ北微高地の方が扇央に近くて谷の数が多いといえ、かつどちらの微高地も同様に埋積が進んでいたのであるから、これだけが根本的な原因とするのは説得力が弱かろう。もうひとつは、社会的要因ともいべきもので、水稻農耕の定着にともなう集団間・集団内諸関係の変化により、南微高地へと移動集結する必要があったから、という理由である。総合人間学部構内 AO22 区で見つかった水田遺構の存在から、比叡山西南麓においては、弥生時代前期後葉には確実に水稻耕作を生業とする社会が定着していたとしてよい。しかし追分町遺跡の範囲内では、目下のところ水田遺構はおろか、それに相応しい土壌も検出できていない。総合人間学部構内のような、東方に吉田山

を控えた安定した後背湿地が確保できる状況にはないのである。

そこで、京都大学構内一帯全体を視野に入れたとき、総合人間学部構内が水田耕作を行う生産領域であるとする、本部構内から北部構内にかけての高地は、居住のための空間であると同時に、生産領域への治水給水の管理にとっても重要な位置を占めていることに気づく。そして実際、前期後半に至ると、総合人間学部構内220地点（AO22区）の水田から、その北東に接する微高地上の238地点（AR25区）、吉田山西麓の219地点（AU30区）、そしてこの追分町遺跡南半へと、おおむね100～200mの間隔で接して遺物の集中出土地点が分布するようになる（図62右）。これは、長原式までの各時期に見られた狭い空間の点的な分布とは明らかに様相を違えており、生産領域とその維持管理を重視した線的な立地が採用されるに至ったもの、と理解したい。つまりこの前期後半において、それまでの資源獲得型の立地戦略から、資源管理型のそれへと転換が果たされたもの、とみられるのであり、追分町遺跡における北微高地から南微高地への活動中心地の移動は、近隣他地点の動向と連動した立地戦略転換の一環であった、と考えられるのである。

**京都盆地における動向** このように、弥生時代前期後半における追分町遺跡内部での活動地点の動きは、水系による結びつきが想定される近接地点の動向とも密接に関係づけられることを示唆したが、京都盆地全体のなかでの遺跡の動向とどのように関連づけられるのかも、気になるところである。縄文晩期末から弥生前期の遺物が良好な状態で出土している遺跡は、京都大学構内遺跡のほかには図62左に示すごとくであり、烏丸町遺跡については突帯文土器の出土以外に状況がはっきりしていないが、さしあたり該期の良好な遺跡になると仮定すると、おおむね鴨川水系沿いに、3～4 km程度の間隔をもって分布がみられる点が注目されよう。水稻農耕導入期における遺跡間のネットワークの存在、あるいは集団の基本的な領域の広さにかかわるような、きわめて示唆的な結果といえる。

#### 4 おわりに——まとめと課題——

本稿では、これまで内容の全体が明らかでなかった追分地蔵地点（BA30区・6地点）の出土資料の紹介を行い、それらが弥生前期後葉を中心とするものであることを確認した。そして、他地点の調査成果も加味して、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての北白川追分町遺跡の内部での動向をさぐり、前期後葉における北微高地から南微高地への活動中心地の移動と、それが資源獲得型の立地から水稻農耕社会の資源管理型のそれへの転換を反映したものである、と推察した。

## お わ り に

いずれも、あくまで限られた調査成果からの憶測にすぎないけれども、今後調査を進めていく上での問題意識となるよう、検証すべき課題として述べてみたものである。居住にかかわる遺構の発見に乏しいため、遺跡内のそれぞれの空間が果たしていた役割についてははっきり特定できていない。今後の遺構発見を待つとともに、自然科学的な手法も含めて、空間の機能を明らかにする方法を追究していく必要が感じられる。また、黄色砂埋積後で地形環境が大きく変わってしまった弥生中期以降の状況についても詳しく触れ得なかった。方形周溝墓が2箇所で見つかったことを除くと、得られている成果はきわめて断片的であるといえるが、成果の蓄積を待って検討を加えたい。

また、縄文時代から弥生時代への移行に際して、京都大学構内遺跡で認めたような立地戦略の転換とも言うべき変化が、他の遺跡や遺跡群でも認められるような普遍的なあり方なのか、あるいは局地的で特異なあり方のひとつであるのか、条件に適した遺跡や遺跡群を選んで、比較検討していく必要がある。近隣では、例えば山科区中臣遺跡は、京都大学構内遺跡と同様に、縄文中期以降弥生時代を通じて一定の範囲内に連続と活動が続けられていることがわかっており、調査件数も多い。今後有力な比較対照の資料を提供してくれるものと期待される。

いずれにしろ、縄文時代から弥生時代を通じて活動の地となっている北白川追分町遺跡、あるいはそれを含んだ京都大学構内遺跡一帯は、弥生前期末の洪水層に覆われて当時の地形が残されるという条件も手伝って、縄文から弥生へのさまざまな変革が想定される時期に、ひとつの空間内でどのようにひとびとが活動し、それが変遷していったのかを見続ける定点観測には格好の場といえるだろう。今後も、こうした視点に立った調査研究を進めていきたいと考えている。

成稿にあたり、京都大学埋蔵文化財研究センターの諸氏に貴重な助言と協力を数多く得た。また、追分地蔵地点の調査成果の使用については、山口県埋蔵文化財研究センターの中村徹也氏に快諾いただき、今出川通り内の調査については、京都市埋蔵文化財研究所の高橋潔・長戸満男・竜子正彦の各氏に御教示いただいた。末筆ながら厚く御礼申し上げる。

### 〔注〕

(1)これに先行するものとして、遺跡発見の端緒となった濱田耕作氏らによる1923年の縄文時代遺物の採集と、その後の試掘調査がある。

梅原末治「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告』第5冊、1923  
島田貞彦「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号、1924

(2)石田志朗・中村徹也・中村友博『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』、1972

## 北白川追分町弥生時代遺跡の展開

- (3)帝塚山考古学研究所『弥生前期地域論』, 1984, p.45  
伊藤淳史「北白川の弥生土器」『先史時代の北白川』(京都大学文学部博物館図録第4冊), 1991
- (4)長戸満男・竜子正彦・尾藤徳行「京都大学構内遺跡」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』, 1997  
なお図51中のB地点も京都市埋蔵文化財研究所による調査である。  
竜子正彦「京都大学北部構内遺跡」『平成8年度京都市内遺跡立合調査概報』, 1997
- (5)伊藤淳史「京都盆地の弥生時代遺跡」『京都大学埋蔵文化財研究センター紀要X I』(『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』所収), 1995
- (6)このほかにも, 昭和4(1929)年の今出川通りの市電敷設工事に際しても同様な石仏類が多数出土したとされ, また208地点の調査でも表土掘削中に石仏が出土している。石仏の由緒等の伝承については下記を参照した。  
京都市立北白川小学校『北白川こども風土記』, 1959, pp.75-6  
北白川小学校創立百周年記念委員会『北白川百年の変遷』, 1974, pp.74-9
- (7)この経緯については下記を参照した。  
京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊——京大農学部遺跡BG36区——』, 1978, pp.2-4
- (8)この追分地蔵地点の層位的状況については, かつて泉拓良氏が言及した際には, 旧白川の浸食による崖面と理解された。しかし, 最下層に礫層が堆積していることや, その後の他地点での調査成果を加味して, 高野川系流路による浸食が及んだとみる方がより妥当と考えた。  
泉拓良「京都大学北部構内の地形復原——縄文時代から弥生時代——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』, 1978
- (9)深澤芳樹「土器のかたち——畿内第I様式古・中段階について——」『叻東大阪市文化財協会 紀要』I, 1985
- (10)いわゆる生駒西麓産胎土の前期土器はAU30区(219地点)で(93年度年報I 1), 瀬戸内系甕はBF30区(229地点)で(94年度年報II 392)報告されている。後者はA地点出土品にも含まれていることを確認している。
- (11)末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第十六冊), 1943, 図版第42-15
- (12)弥生時代前期の既往の編年観および削出突帯I種・II種などについては下記に従った。  
佐原真「山城における弥生文化の成立——畿内第I様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』第50巻第5号, 1967
- (13)國下多美樹「山城地域の中期弥生土器編年——搬入土器と地域色を中心に——」『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』, 1993
- (14)総合人間学部構内AO22区(220地点)の成果については, 1995年度年報に略述しているが, 資料の全容は刊行準備中の発掘調査報告書に依られたい。AR25区(238地点)については1996年度年報にて報告予定である。
- (15)叻京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書 第22冊 雲宮遺跡』, 1997, pp.92-144  
叻向日市埋蔵文化財センター『向日市埋蔵文化財調査報告書 第45集 鶏冠井遺跡』, 1998, pp.237-58
- (16)藤田三郎「大和第II様式の土器」『みずほ』第25号
- (17)高槻市教育委員会『芥川遺跡発掘調査報告書——縄文・弥生集落跡の調査——』, 1995, pp.137-54